学　会　記　事

平成26年度新潟精神医学会

日　時　平成26年10月25日（土）
午後1時40分より
会　場　ANAクラウンプラザホテル新潟
2F　芙蓉

I．一　般　演　題

1　統合失調症患者に対するECT実績調査

池塙　寛子・保谷　智史・染矢　俊幸
新潟大学医歯学総合病院　精神科

【目的】統合失調症に対する電気けいれん療法（ECT）は，日本精神神経学会ECT検討委員会より適応基準が提示され，急性期，緊張病症状を伴うもの，気分症状を伴うものが良い適応とされているものの，実際の臨床においては治療抵抗性，薬剤不耐性を理由に用いられることも少なくはない．今回我々は，ECTを導入された統合失調症例の診療録を調査し，病型およびECT導入理由という観点から，ECTの臨床効果について検討を加えた．

【方法】2005年1月から2014年7月まで，新潟大学医歯学総合病院精神科にて統合失調症の治療で初めてECTを導入された患者を対象とした．病型，ECT導入の理由という観点から，治療反応性について後方視的にカルテ調査を行った．尚，対象患者の情報から個人が特定できないよう十分な配慮を行った．

【結果】症例は20例（男性5例，女性15例）あり，病型の内訳は鑑別不能型が50％を占めていた．導入理由としては治療抵抗性が85％と最も多かった．病型別にみると，緊張型では比較的治療反応性が良く，解体型で治療反応性が劣る傾向がうかがわれた．また，治療抵抗性を理由としてECTを導入された症例では47％で治療反応性を認めた．治療反応性を認めた症例のうち，維持ECTへ移行した症例は3例だった．

【考察】調査の規模が小さいため判断の限界はあるが，緊張型において良好な治療反応性がうかがわれ，治療抵抗性の統合失調症においても一定の治療効果を認めるという結果は，先行研究に矛盾しなかった．当日は，維持ECTについての文献的考察も加えて発表する予定である．

2　Cornelia de Lange症候群に関連した自閉スペクトラム症の2症例

渡邉　藍子・福井　直樹・吉永　清宏
遠藤　太郎*・北村　秀明・染矢　俊幸
新潟大学医歯学総合病院　精神科
新潟こころの発達クリニック*

【はじめに】Cornelia de Lange症候群（CdLS）は先天奇形症候群の1つで，常染色体優性またはX連鎖性遺伝と考えられ，発生頻度は出生1万～5万人に1人．特徴的な顔面や成長障害，四肢や各臓器の奇形の他，知的能力障害や神経発達障害が高率に認められる．コヒーシン複合体やその制御因子の遺伝子変異が複数個報告され，転写の調節異常が引き起こされることがCdLSの病態だと考えられている．我々はCdLSに関連した自閉スペクトラム症の2症例を経験したので報告する．

〔症例1〕33歳，男性．3歳時に当院小児科でCdLSと診断され，幼少期には言語運動発達の遅れ，物の位置やシーツの皺へのこだわりがあった．X-15年（18歳）作業所に通所後から情緒不安定が目立ち始め，頻回の110番119番通報が出現．X-9年より当科外来に通院，薬物加療が開始されたが著変はなく，X-3年より聴覚過敏や女性の胸に対する強い興味が認められた．X年3月抜歯治療後から易怒性悪化し，X年4月当科に入院した．病棟では人の会話に急に割り込む，以前旅行した北海道の観光名所や食べた物などを繰り返し書きだすなど反復的な行動や，予定日時へのこだわり